

## 水稲新品種「宮崎もち」について

内山田博士・西山 寿・新村善弘・瀬 篤  
黒木雄幸・上野貞一・衛藤信男・本部裕朗  
(宮崎県総合農業試験場)

昭和45年当時の宮崎県における早期水稲稲栽培面積は420haでその内「タツミモチ」が60%を占めていた。「タツミモチ」は早生、いもち耐病、良質の糯種であるが、耐倒伏性、穂発芽性等の特性が不十分であり、また早熟のため雀害もあるので、これらの特性の改良が強く要望されていた。昭和50年より配布試作中であった「宮崎糯17号」は、中生、強稈、良質多収、いもち耐病等の育種目標をほぼ達成して昭和53年より宮崎県で奨励品種、熊本県で認定品種に採用され、通称名を「宮崎もち」として普及に移されることになったので、育成経過と特性概要を報告する。

## 来歴ならびに育成経過

「宮崎糯17号」は昭和45年春季、宮崎県総合農業試験場において、中生、強稈、いもち耐病、多収糯品種の育成を目標に、やや強稈、多収の「オトメモチ」を母とし、いもち病抵抗性強の「トドロキワセ」を父として交雑育種法により育成した系統である。

昭和45年交配、同年秋温室栽培でF<sub>1</sub>を養成した。翌年3～10月にビニールハウス密播栽培でF<sub>2</sub>～F<sub>3</sub>集団を養成し、糯性について成群選抜を行った。昭和47年F<sub>4</sub>世代は早期栽培ほ場に移し穂別系統として個体選抜を行い、以後系統選抜により固定を図ったものである。昭和49年(F<sub>6</sub>)より「早系糯219」の名で生産力検定予備試験および特性検定に供試した結果が有望と認められたので、昭和50年(F<sub>7</sub>)より「宮崎糯17号」の系統名で宮崎県および関係県に配布し、地方的適否を検討してきた。昭和53年度世代はF<sub>10</sub>にあたる。

## 特性の概要

1. 形態的特性 移植時の苗丈、葉色は中位、成熟期の稈長は「タツミモチ」より7～8cm程度短い。穂長もやや短いが穂数はかなり多く短稈穂数型に属する。葉色は「タツミモチ」よりやや淡く中位、稈はやや太く剛さは中位、止葉はやや広くやや直立し、草姿は良好である。稀に短芒があり、ふ先色は紫褐、ふ色は黄白、粒着密度はやや密、熟色は良好で、脱粒性は難の糯種である。

玄米はやや厚く粒形は中の円で、粒大は中の小、玄米千粒重は「タツミモチ」よりやや軽く、蠟白色を呈し光沢は良い。みかけの品質、検査等級は「タツミモチ」と同

第 1 表 一般特性(宮崎県総合農試)

形質	品種名	宮崎もち (比較) (参考)		
		宮崎もち	タツミモチ	コシヒカリ
出穂期(月・日)		6・30	6・24	7・2
成熟期(月・日)		7・31	7・25	8・3
稈長(cm)		81	88	88
穂長(cm)		17.3	18.1	17.8
穂数(本/m <sup>2</sup> )		472	405	496
芒の多少、短稈	稀・短	無	稀・短	稀・短
稈先色	紫褐	紅	白	白
稈色	黄白	黄白	黄白	黄白
脱粒性	難	難	難	難
耐倒伏性	中	弱	弱	弱
穂発芽性	やや易	易	難	難
耐病性	葉いもち病	中	強	やや弱
	穂いもち病	やや強	やや強	やや弱
	白葉枯病	やや弱	やや弱	やや強
a 当玄米重(kg)	51.4	48.5	51.2	
同上収量比(%)	106	100	106	
玄米千粒重(g)	19.9	21.0	19.8	
玄米品質	上 下	上 下	上 下	
餅 質	良	良	—	

注) 調査年次は昭和49～52年の4カ年の平均

程度の良質で搗精歩留も「タツミモチ」並である。餅質および食味については餅加工業者に依頼した結果、外観白さについては「タツミモチ」と同程度であり、ひき、弾力は「タツミモチ」よりすぐれ、良質の餅であると評価された。食味についても「タツミモチ」と同程度でかなり良い。

2. 生態的特性 出穂期、成熟期は「タツミモチ」より5～6日程度遅く、「コシヒカリ」より3～4日程度早く、宮崎県早期栽培では中生に属する。

稈はやや太く、短稈のため糯品種としては耐倒伏性は強く「タツミモチ」に優る。いもち病抵抗性遺伝子は、Pi-a と推定され、ほ場抵抗性は葉いもち病については「タツミモチ」、「トドロキワセ」よりやや弱いが、「コシヒカリ」より明らかに強く、一般的には中程度と評価される。また穂いもち病に関しては「トドロキワセ」よりやや劣るが「タツミモチ」と同程度であり、「コシヒカリ」より明らかに強く、やや強と思われる。

白葉枯病抵抗性は「タツミモチ」、「トドロキワセ」よりややまさるが「コシヒカリ」より劣りやや弱とみられる。穂発芽性はやや易であるが「タツミモチ」にまさり日照制限による障害不稔の発生程度は「タツミモチ」並の中位とみられる。

収量性は「タツミモチ」にまさり「コシヒカリ」並で糯品種としてはかなり多収である。

#### 適地および奨励品種採用県

「宮崎もち」は昭和50年から「宮崎糯17号」の系統名で九州早期水稲栽培地帯の宮崎、鹿児島、熊本(天草)ならびに栃木の各県に配布し地方的適応性が検討されたが、宮崎県および熊本県天草の早期栽培地帯で優れた成績を示し、昭和53年より宮崎県で奨励、熊本県で認定品種に採用され普及にうつされることになった。

宮崎県における昭和53年度早期水稲糯栽培面積は、早期水稲全作付面積(12,000ha)の3%(330ha)でその内「タツミモチ」が約90%を占めている。

「タツミモチ」はいもち病に強く品質食味も良いが、長稈で倒伏しやすく、倒伏による登熟障害や、穂発芽などで品質が低下したり熟期が早いいため雀害を受ける等の障害が多く「タツミモチ」並の耐病性、品質をもった中生の強稈、耐病、多収、良質品種が強く要望されていた。

「宮崎もち」は葉いもち抵抗性は中位で、やや穂発芽し易く、やや小粒であるが、収量性は高く、品質、食味

は「タツミモチ」と変わらず、耐倒伏性、穂発芽性など安全性は「タツミモチ」にまさり適応性地域も広いので、「タツミモチ」に代替しうる品種として県下早期栽培地帯全域に普及する。

また、熊本県の天草では、いもち抵抗性が劣る「カグラモチ」およびその他の早期用もち品種に代えて250haに導入が予定されている。

#### 栽培上の注意

葉山がやや広く多肥に過ぎると葉が下垂して、葉いもち病や紋枯病を誘発助長し倒伏する危険性もあるので、肥培管理に十分注意するとともに、穂発芽性がやや易で刈りおけると着色米が発生し品質が低下するので、適期収穫および乾燥方法等に留意する必要がある。

また、白葉枯病に弱いので常発地での栽培をさけ防除に留意する。

なお、稈先色が明瞭な紫褐色であることは、刈取り前の立毛中に異株を除去するのに好都合であるので、これを励行して糯としての純度を高め商品性の向上につとめる。

#### 命名の由来

本品種は宮崎県総合農業試験場(県単)で育成され、将来宮崎県早期栽培用糯種の主導品種となることに因む(宮崎糯)。